

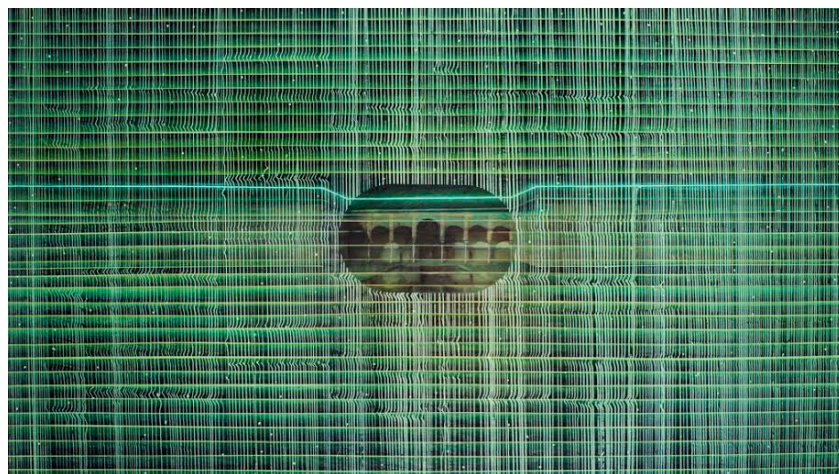
ニンフェアール 第11回公演
エレクトリック・ギターの現在

佐藤紀雄（ギター）

森川栄子（ソプラノ）

2015.6.21（日）17:00 開演

会場：5/R Hall & Gallery 音楽ホール



Fernando Morelo 《The Other Side》

主催：5/R Hall & Gallery 音楽ホール、ニンフェアール

マネジメント：ミュージック・ステーション

後援：名古屋芸術大学音楽学部

このコンサートはサントリー芸術財団の推薦コンサートです。

ご挨拶

本日はお忙しい中、ニンフェアール第11回公演にご来場頂き、有り難うございます。2005年の第1回公演から毎年続けてこられましたのも、ご来場下さる皆様、ホール関係者、公演に関わって下さるの方々の暖かいご支援の賜物であり、心からお礼申し上げます。

今回の公演では、佐藤紀雄さんの協力により、エレキギターというクラシックコンサートで取り上げられる事の珍しい楽器に焦点をあてています。愛知県を拠点に国内外で活躍中の3名の作曲家、田中範康、山本裕之、伊藤美由紀の新作のなかでは、クラシック作曲家の視点から各々が異なったアプローチによりエレキギターを扱っています。それらの作品を、国際的に活躍されるクラシックギター奏者である佐藤紀雄さんの演奏により楽しんで頂きます。また、ゲストとして、ニンフェアールでは3回目の登場となるソプラノの森川栄子さんに、クラシックギターとソプラノという組み合わせで、関わって頂きます。

昨年の第10回公演で、栄誉ある第14回佐治敬三賞(2014)をいただいたあとの、新たなる音響世界への挑戦を、ご堪能下さい。

2015年6月21日

ニンフェアール

プログラム

プレトーク (作曲家：田中範康、山本裕之、伊藤美由紀)

ジョルジオ・コロambo・タッカーニ 《ルルイエ》 (2013) エレクトリック・ギターの為の (日本初演)
Giorgio Colombo Taccani *R'lyeh* (2013) for electric guitar (J.P.)

湯浅譲二 《死者の奢り》 (1968) エレクトリック・ギターの為のプロジェクト
Joji Yuasa *Shisha no Ogori* (1968) for electric guitar

山本裕之 《中継のエレキギター》 (2015) エレクトリック・ギターの為の (世界初演)
Hiroyuki Yamamoto *Electric Guitar the Relay* (2015) for electric guitar (W.P.)

休憩 (15分)

フランツ・シューベルト 『ヴィルヘルム・マイスター修業時代 (ゲーテ)』 より
《ミニヨンのうたった4つの歌》 (1815/1826) ソプラノとギターによる
Franz Peter Schubert (1797-1828) *4 Lieder von Mignon aus "Wilhelm Meisters Lehrjahre" von Johann Wolfgang von Goethe (1815/1826)*

伊藤美由紀 《彼方》 (2015) エレクトリック・ギターとエレクトロニクスの為の (世界初演)
Miyuki Ito *The Other Side* (2015) for electric guitar with electronics (W.P.)

ヴァルター・トーマス・ハイン 《アフマートヴァによる4つの箴言的な歌曲》 (1997)
ソプラノとギターの為の作品1
Walter Thomas Heyn *4 Aphoristische Lieder auf Texte der Achmatowa op.1* (1997)

田中範康 《Sparkling in the Space VI 楽興の時》 (2015)
エレクトリック・ギターとエレクトロニクスの為の (世界初演)
Noriyasu Tanaka *Sparkling in the Space VI* (2015) for electric guitar with electronics (W.P.)

佐藤紀雄 (ギター)・森川栄子 (ソプラノ)

作品解説

ジョルジオ・コロombo・タッカーニ 《ルルイエ》 (2013) エレクトリック・ギターのための (日本初演)
悪夢と死体の架空都市であるルルイエは、黒い星からしみ込まれた巨大で忌々しい形態により、数えられない永劫のなかで作られた。クトゥルフとその集団は、緑のどろどろした天井に隠れている。巨大な天使と石の外観をもつ恐ろしいイメージと象形文字による邪悪な存在である。ルルイエの形状は、特異で、地球とは異なった局面で、忌まわしい球体を思わせる。この死んでいるクトゥルフは、土地のリーダーが戻ってくる事を望んでいる。これは、私の最初のエレキギター作品を喚起させる背景である。構造や作品についての無感情な情報よりも、リスナーにとっては有効であると思われる。 作曲家本人による寄稿。伊藤美由紀記

湯浅譲二 《死者の奢り》 (1968) エレクトリック・ギターのためのプロジェクション

この作品は、1968年、大江健三郎原作のラジオドラマ「死者の奢り」の再制作版のために書かれた音楽で、当時は3人のギターリストによって演奏、録音された。導入部のみが作曲され、以降は、さまざまな奏法の指示があり、どの奏法を使って演奏するのかは、奏者自身が個々に選んでいく。そのため、結果は毎回違ったものとなる。そうやって演奏された録音の中からシーンに合うものを湯浅自身が選択し、ドラマ音楽に仕上げた。ミュージック・コンクレートなど多くの電子音楽を作曲していたこの時期の湯浅作品は、音の素材や形を、ある法則やルールによって選択していくことで、音楽の緊張感とその方向性を作り上げていくものが多い。中でもこの作品は、上述した制作理由から、そういった選択を演奏者に委ねたインプロヴィゼーションの要素が非常に強い音楽となっている。

「もともと3人の奏者のために書いた作品が、佐藤さんによって、どのような音楽になっていくのかとても楽しみです。(湯浅譲二氏談)」 今井智景

山本裕之 《中継のエレキギター》 (2015) エレクトリック・ギターのための (世界初演)

演奏の過程で発生してしまうノイズ、あるいは楽音に自ずから含まれているもののあまり意識されないノイズ (例えばピアノ打鍵時の「こつん」という音) を私は「裏の音」と呼んでいるのですが、それらを電気増幅して「表」におびき出す《中継の〜》シリーズを最後に書いたのは2000年であり、いまなぜそれを15年ぶりに復活させたのかというと、以前からギターの演奏で左手がフレット上の弦を擦る音にいつも自分の耳が過敏に反応してきたもののなかなかそれを自作に応用させる機会がなく、今回「エレキギター」がテーマということで、もしかしたら余計な共鳴体を持たないこの楽器ならアコースティックギターよりもさらに「裏の音」を効率的に音楽化できるのではないか、と思ったからです。そこで弦の生々しいノイズを拾うために曲の多くの部分では、本来エレキギターの原理である「振動をコイルでピックアップして音をアンプに送る」のではなく、敢えて楽器にマイクを近接させて音を拾うというアコースティックな手法を採りました。また、意図的にややこしい指さばきを指定してあるのは、もちろん多くのノイズを発生させたいがためです。 山本裕之

シューベルト 『ヴィルヘルム・マイスター修業時代 (ゲーテ)』より 《ミニョンの4つの歌》 (1815/1826)

ゲーテの大作「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」に登場する少女ミニョンは、幼い頃イタリアで拐かされたのちサーカス団に売られ、たまたまヴィルヘルムが滞在していたドイツの街でそのサーカス団が公演していた時に、ヴィルヘルムがその扱いを見かね、サーカス団に対し金銭を支払って引き取った少女である。過酷な状況から救い出してくれたヴィルヘルムに対し、父親的存在としての敬愛の情と同時に、思春期の少女らしい純粋な恋心をも寄せるが、それに気づかぬヴィルヘルムの態度や、出会ったときに「お前は男の子なのか、女の子なのか」と問われたことに深く傷つき、心の内を語らぬという誓いを固く守っている。

シューベルトはこの内の「憧れを知る人だけが」には何度も作曲しており、さまざまな版が残されている。その中で最も知られた作品が、本日演奏する4曲目である。本日は、本来歌とピアノの為に作曲されたこれら4曲を、歌とギターによって演奏する。

森川栄子

伊藤美由紀《彼方》(2015) エレクトリック・ギターとエレクトロニクスの為の (世界初演)

この作品は、スペイン人のフェルナンド・モレロ氏による絵画《The Other Side》(表紙イメージ使用)からのインスピレーションにより作曲し、タイトルは同名の《The Other Side》である。私のイメージしていたエレキギターの歪んでいるが美しい音響世界を、この絵画から感じ、どこか向こう側の未知の歪んだ音響世界を創造している。エレキギター特有の音をいかして、その音素材を様々な方法で加工しエレクトロニクスを制作している。エレクトロニクスを演奏中の操作で使用するにより、複雑な音響世界を共存させている。エレクトロニクス制作のためのエレキギター音素材の録音には、本日初演して下さる佐藤紀雄さんの協力を得ている。複雑な音響加工を行うためにアンプを通さずに録音を試みている。佐藤紀雄さんに協力していただいたおかげで、クラシックギターとエレクトロニクスの為の作品に続き、長年挑戦してみたいと思っていたエレキギターとエレクトロニクスの作品が実現可能となりました。

伊藤美由紀

ヴァルター・トーマス・ハイン《アフマートヴァによる4つの箴言的な歌曲》(1997)

1953年旧東独ザクセン州ゲルリッツに生まれ現在はベルリンで活動しているドイツの作曲家 ヴァルター・トーマス・ハインによって1980年に作曲された、4つの歌曲と3つの間奏曲からなる、声とギターのためのツィクルス。原詩は当然ロシア語であるが、本作品はそこからサラ・キルシュ(1), ライナー・キルシュ(2,3), ハインツ・チェヒョフスキ(4)によってドイツ語に訳されたものに作曲されている。

森川栄子

16歳の頃から私は歌手の伴奏をし、彼らのための作曲もしてきた。たいていの場合歌手は女性であったけれども、私が選んだ詩の殆どが、ハイネ、ケストナー、ブレヒト、フォンターネといった有名な男性詩人のものであった。男性的な思考・作品と女性的な歌唱とのコントラストは自分にとって常に刺激的なものであった。それ故にこれまで私の作った歌曲は、たったひとつのツィクルスを除き、さまざまな声質の女声のためのものばかりとなっている。

このアフマートヴァの詩による歌曲集は、それまで褒めてくれたことがなかった、ライプツィヒ音大での私の師匠であるジークフリート・ティーレ教授が、「これは良い作品だ」と評してくれた初めての作品である。そこで私はこれに「作品番号1」を与えることにしたのである。そして今日に至るまで、私の大好きな作品のひとつなのである。

作曲家本人による寄稿。森川栄子訳

田中範康《Sparkling in the Space VI 楽興の時》(2015) エレクトリック・ギターとエレクトロニクスの為の (世界初演)

私のエレキギターのイメージといえば、1960年代ではグループサウンズ、そして今では、人工的に音を歪ました、最も激しい音楽の一群であるハードロックなどである。個人的な趣味で言えば、これらの音楽は決して好きとは言えなかった。しかし、ジャンルに拘らない、新しい音楽の形態が模索されている現在、作曲家として、あらゆる楽器、ジャンルで作品を書く必要を多に感じていたことも事実である。そこで、今回、思い切ってチャレンジしてみることにした。書き始めの頃は、分からない事が多く、音のイメージがなかなか作り上げられず、プレッシャーに苛まれる日々が続いたが、思考を重ねていくうちに、エレキギターの響きの魅力に自然に引き込まれていくようになっていった。本作品は、異なる楽想による2章で構成されている。事前に作り込んだ電子音を加えることで、エレキギターの発する音と電子音とのアンサンブルによる、立体的な音響空間の構築を目指した。使われている電子音は、エレキギターから発する多彩な音を中心に、それ以外の音素材も加え、様々な技法により音声変調させて制作したものである。なお、第2章では部分的にポップス的なフレーズも加えてみた。聴衆の方々にそれを感じていただければ本望なのだが……。最後に、日本を代表するクラシックギター奏者の佐藤紀雄氏が、どのようにエレキギターを操るのが、本作品の創作課程で最も楽しみであったことを付け加えておく。

田中範康

プロフィール

佐藤紀雄（ギター）

1951年生まれ。1971年（現）東京国際ギターコンクール優勝。以後、ギター演奏と指揮活動を広範囲に行ってきた。ギター演奏においてはクラシックレパートリーその他、武満徹、高橋悠治、近藤譲、松平頼暁、福士則夫、その他多くの作品の初演、また指揮者としても内外の新しい作品の初演を含め数多く演奏している。海外からの招聘も多く、これまでにパリ、ニューヨーク、ハンブルク、ロンドン、メルボルン、北京、メキシコ、デンマーク、フィンランド、エストニア、ブルッセル、アントワープ、ハバナ、イタリアなどでリサイタルや各地のアンサンブルと共演してきた。1997年にアンサンブル・ノマドを結成し音楽監督として毎年定期演奏会を開いてきた。またアンサンブル・ノマドでも海外から多く招かれ、ハッダースフィールド音楽祭、ガウデアムス音楽週間、モレリア音楽祭など主要な音楽祭で演奏してきた。1990年、京都音楽賞（実践部門賞）。1994年、中島健蔵賞。1996年、朝日現代音楽賞。2002年、アンサンブル・ノマドとして第二回佐治敬三賞を受賞。ギター・ソロのCD、アンサンブル・ノマドのCDなど多数リリースしている。桐朋芸術短期大学、青山学院短期大学、また日大芸術学部各ギター科で後進の指導にあたっている。

森川栄子（ソプラノ）

北海道教育大学札幌分校特音課程および東京藝術大学声楽科卒業、同大学院修了。DAAD奨学金を得て93年よりベルリン芸術大学に留学し、アリベルト・ライマンに現代声楽曲を、エルンスト・ゲロルト・シュラムに声楽を学ぶ。94年ダルムシュタット現代音楽講習にてクラーク・ヒュタイン音楽賞。96年ガウデアムス現代音楽コンクール総合第2位、第65回日本音楽コンクール第1位および増沢賞。ミュンヘン・ビエンナーレ（細川俊夫『リアの物語』ほか）、ザルツブルク音楽祭（ラッヘンマン『マッチ売りの少女』）、ベルリン・コーミッシェオーパー（リゲティ『ル・グラン・マカーブル』）出演など、数多くの新作世界初演を含む現代声楽作品・オペラを中心に主に欧州にて活躍。国内では2005年に新国立劇場委嘱新作（久保摩耶子『おさん』）、2007年東京交響楽団定期演奏会（ヘンツェ『ルプパ』）、2009年東京室内歌劇場公演（リゲティ『ル・グラン・マカーブル』、ヒンデミート『往きと復り』）、2010年東京室内歌劇場公演（青島広志『火の鳥』）などに出演。2008年秋の帰国以来、愛知県立芸術大学、お茶の水女子大学において教鞭をとると同時に、ベルリン芸術大学教授アクセル・バウニ氏を共演ピアニストとして招聘し定期的にリサイタルを開催するなど活発な演奏活動を展開している。愛知県立芸術大学教授。

ジョルジオ・コロombo・タッカーニ（作曲）

1961年ミラノ生まれ。クラシック音楽を続けながら、近代文学の学位をミラノ大学で取得。音楽史の論文は、ブルーノ・マデルナのHyperionに捧げられている。1993年にMissiroli Prizeを受賞。ミラノ音楽大学では、1984年にピアノ科、1989年に作曲科の学位を得る。S.I.A.E奨学金により参加したローマのサンタ・セシリア・アカデミーでは、フランコ・ドナトーニの作曲のレッスンに2年間在籍する。1991-2001年には、ミラノのエレクトロニック・スタジオで電子音響を使用した作品制作に携わる。彼の作品は、国内外の作曲コンクールを受賞しており、演奏されている。

伊藤美由紀（作曲）

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了。コロンビア大学（ニューヨーク）で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員として IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）にて研鑽を積む。東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン（NY）、アタック・シアター（ピッツバーグ）、オニックス・アンサンブル（メキシコ）、愛知芸術文化センターなどからの作品委嘱ほか、カーネギーホール（NY）、レゾナンス・フェスティバル（パリ）、ISCM 世界音楽の日々（香港）、国際コンピューター音楽会議（マイアミ）、SMC（ギリシャ、スペイン）、Re:New（デンマーク）、ヴィジョネス・ソノーラス（メキシコ）、マニュエル・エンリケ国際現代音楽フォーラム（メキシコ）をはじめ、世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品の発表を続けている。国際交流基金助成により、CMMAS（メキシコ国立音響研究所）に2回のレジデンシー、ジェラシ・アーティストレジデンシー（カリフォルニア）にて創作活動、作品発表も行う。ニンフェアール、JUMP の代表として自主企画公演を定期的に名古屋、ニューヨークを中心に展開。第10回ニンフェアール公演は、第14回佐治敬三賞を受賞。『時の砂』がALCD80からリリース。スヴィーニ・ゼルボーニ出版社（ミラノ）から楽譜出版。『音楽現代』に「トリストラン・ミュライユの音楽的思考」ほか特集記事を執筆。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学非常勤講師。

www.miyuki-ito.com

田中範康（作曲）

東京生まれ。国立音楽大学作曲科並びに器楽科卒業。作品は、NHK-FM、アメリカ、韓国などの放送メディアや、国内はもとより、ドイツ（ベルリン、ボン、ヴァッサーブルク）、オーストリア（ウィーン、ザルツブルク）、フランス（パリ）、北欧（コペンハーゲン、オスロ）、ベルギー（アントワープ、ルーベン）、韓国（ソウル、テグ、マサン）、アメリカ（ニューヨーク）、メキシコ（メキシコシティ、モレリア）の音楽祭などで、広く紹介されている。オーストリアのVMM(Vienna Modern Masters)レーベルから室内楽作品集（Noriyasu Tanaka Chamber music）として、1994年にVol. I (VMM2011)、2002年にVol. II (VMM2036)の2枚のアルバムがそれぞれリリースされている。また2001年には韓国作曲家達と共に、詩人＝李承淳氏とのコラボレーションによる、韓国伝統楽器によるアンサンブル作品「暗闇」がCDリリース（韓国）されている。2011年には、2002年より2009年までに発表された作品の中から、代表的な室内楽作品を収録したアルバム「田中範康作品集」(ALCD87)が、ALMレコードよりCDリリースされた。さらに年内に近年の作品を納めたCDがリリースされる。現在、名古屋芸術大学音楽学部、同大学院音楽研究科教授。日本現代音楽協会会員、日本作曲家協議会会員 日口音楽家協会会員。

山本裕之（作曲）

1967年山形市生まれ、主に神奈川県で育つ。1992年東京藝術大学大学院作曲専攻修了。在学中、作曲を近藤譲、松下功の両氏に師事。これまでに第58回日本音楽コンクール第3位(1989)、現音作曲新人賞(1996)、BMW musica viva 作曲賞第3位(ドイツ/1998)、武満徹作曲賞第1位(2002)、第13回芥川作曲賞(2003)を受賞。またフォーラム91(カナダ/1991)、ガウデアムス国際音楽週間'94(オランダ/1994)、ISCM 世界音楽の日々(ルクセンブルク/2000、横浜/2001)など、様々な音楽祭に入選している。作品はLe Nouvel Ensemble Moderne、Ensemble Contemporain de Montréal、Trio Fibonacci(以上モントリオール)、Nieuw Ensemble、Calefax Reed Quintet(以上アムステルダム)、バイエルン放送交響楽団(ミュンヘン)、ルクセンブルク管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団など、各地の演奏団体等により演奏され、またラジオで放送されている。演奏家や演奏団体、放送局等からの委嘱を受けて作曲を行っている傍ら、1990年より作曲家集団《TEMPUS NOVUM》に参加、2002年よりピアニスト中村和枝氏とのコラボレーション《claviarea》を行う、など様々な活動を展開している。2002年第51回神奈川文化賞未来賞受賞。現在、愛知県立芸術大学准教授、NPO Glovill、Ensemble Contemporary aメンバー。いくつかの作品はM.A.P. Editions(ミラノ)から出版されている。<http://japanesecomposers.info>

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ
「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」より
ミニョンのうたった4つの歌

《ご存じですか、レモンの花咲く国を》
ご存じですか、レモンの花咲く国を
暗い葉陰に金色のオレンジが輝くところを
柔らかい風が青い空から吹き
ミルテが静かに、月桂樹が高く聳えるところを。
本当にご存じ？

そこへ！そこへあなたと共に
行きたいのです、愛する人よ、連れて行って！

ご存じですか、立派な柱と屋根のあの家を
大広間は輝き、造作はきらめく
大理石の像が私を見下ろすように立っていて
「哀れな子よ、どうしたの？」と話しかけるあの家を。
本当にご存じ？

そこへ！そこへあなたと共に
行きたいのです、守ってくれる人よ、連れて行って！

ご存じですか、あの山々と峠道を。
口バは霧の中で道を探さなければならないし
洞穴には大昔から龍が棲んでいて
切り立った崖のそのまた上に水の溢れるところを。
本当にご存じ？

そこへ！そこへと
私たちの道は行くのです！お父様、連れて行って！

《語れとは言わないで》
語れとは言わないで、沈黙させておいて下さい
私の秘密は義務なのですから
自分の内面を全てさらけ出したいけれど
運命だけがそれを拒むのです。

時が来れば太陽が昇って
暗い夜を消し去り明るくしてくれます。
硬い岩もその胸襟を開いて
深く隠された泉を与えることを拒まないでしょう。

誰もが友の腕に安らぎを求め
そこで心の内の嘆きを吐き出すことができる。
たったひとつの誓いが私の唇を閉ざして
神だけが、それを開くことを許されるのです。

《このままの姿で居させて下さい》
このままの姿で居させて下さい、しばらくの間だけ
白い衣裳を脱がせないで
私はこの地上から急いで誰もが入る暗い家へと
降りていかねばならぬのですから。

そこで私はほんのちょっとの間だけお休みして
それから新しい眼差しを開くのです
衣裳もリボンも冠も
そこに置いていくのです

天国にいる者は皆
男か女かなんて訊きません
浄められたその身体は
服も皺も纏っていないのです

生きる為の苦勞をすることなくこられたけれど
深い心の痛みは十分に味わってきました
その苦痛で私はこんなに早く老いてしまいました
どうぞ再び永遠の若さを与えて下さい

《憧れを知る人だけが》
憧れを知る人だけが
私の苦しみをわかってくれる！
たったひとりで
あらゆる喜びから切り離されて
天空の
遙か彼方を見つめる。
ああ、私を愛する親しいかたは
遙か彼方に。
眩暈が私を襲い
はらわたが燃えるようだ。
憧れを知る人だけが
私の苦しみをわかってくれる！

アフマートヴァによる4つの箴言的な歌曲 作品1

《ロンドン市民に》

シェイクスピアの24作目の戯曲
時間には無頓着だ。
不味いディナーのお客には
むしろハムレットやシーザー（ヤリア王ⁱ）の
鉛のように重い展開を朗読しましょうか
小鳩ちゃんジュリエットが出てくれば
歌いながら松明を掲げて葬列が行くよ
雇われた殺し屋に身震いし
血塗られた窓にマクベスを見れば……
いや、それじゃない、それじゃないんだ。
こんなのを読むには、パワーが足りないよ。
(1940年)

《ミューズ》

こんなお荷物と共にどうやって生きろというのか
そして連中はそれを「ミューズ」と呼ぶのだ
彼らはこう言う：草原のインスピレーション！
彼らはこう言う：神々しき眩き……！
ミューズは高熱のごとくお前を襲う
そしてその後また一年もの間黙りこくってしまう。
(1960年)

《詩人》

考えてもみよ、それを今や作品と呼ぶのだよ。
お気楽な生活、だね…
ある楽曲をちょっと盗み聞きし
そしてこう言うのさ「自分が作った」と。

そして、誰かのスケルツォの
ほんの数行を引っ張ってきて
哀れな心が
花咲く野原でため息をつく主張するんだ。

そして森がざわめき
口つぐむ松が見えてくる
全てを灰色の
霧のカーテンが吹き覆う間。

左から、右から --- 私は盗み取る
罪の意識など無く
邪悪な人生からほんの僅かばかりの
夜の静寂の残り滓を。
(1959年夏 コマロヴォにて)

《願いごと》

高い門の向こうの
オホタ川ⁱⁱの湿地の向こう側から
一度も通ったことのない道を通って
手入れされていない草原を通って
夜の監視帯をすり抜けて
聖行列の喧噪のなか
招かれなくとも
約束せずとも
うちに晩ご飯にいらしてください
(1936年4月15日)

ⁱ ロシア語原詩には「リア王」があるが独語訳には無い

ⁱⁱ ペテルブルクを流れるネヴァ川の支流

日本語訳 森川栄子

● 《ニンフェアール第12回公演》のお知らせ：2016.7.10（日）愛知芸術文化センター小ホール
愛知県文化振興事業団との共催企画：『リコーダーの鈴木俊哉＋アコーディオン＋エレクトロニクス』